

無人運航船プロジェクト・MEGURI 2040

対談

自動運航船の未来

国土交通省・海員組合の合同視察、これまでを振り返る

日本財団が推進している無人運航船プロジェクト「MEGURI 2040」の複数船舶を遠隔で航行支援する「陸上支援センター」が、一昨年の7月に、古野電気本社内に構築され、船舶事故の防止、海運業の担い手不足、離島航路の維持など、さまざまな社会課題の解決につながるものとして研究が進んでいる。また、船舶による実証実験も行われ、陸上支援センターでの機関部実証実験をはじめ、新岡山港と小豆島の土庄港を結ぶ「おりんぴあどりーむせと」での実証実験、内航コンテナ船「げんぶ」の実証実験などを国土交通省海事局と海員組合は合同で視察してきた。今回は実証実験船「げんぶ」と一緒に乗船視察した国土交通省海事局の後藤章文船員政策課長と田中伸一組合長代行が対談し、これまでの視察と検証を振り返った。

後藤章文国土交通省海事局船員政策課長・要約

内航コンテナ船「げんぶ」に乗船しての視察は、実際に船員の仕事を視ることができた上に、陸上支援センターの役割や自律航行システムの能力、通信回路を通しての連携など、深い部分まで理解する機会となり、貴重な検証をすることができました。船員や船舶の安全を守る観点から、船員の航海当直をサポートするための自律航行支援システムなどは、大きな役割を担っていくと思われます。その意味で自動運航船の技術開発の歩みは進めていくべきと思います。

田中伸一組合長代行・要約

国土交通省のご協力により実現した乗船視察ですが、船員実務と自律航行システムの役割、また陸上支援センターの課題など、実際に視て知ることで、理解が深まったと思います。実証実験以降も制度設計や法的責任の在り方など、課題は山積していますが、船員の安全を守るために、船員の労務負担を軽減するための機器開発や技術開発については、その歩みを止めてはならないという思いは同じです。

「海員だより」